

日本語・日本語 教育を研究する

第20回

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究について情報をおとどけしています。今回のテーマは「日本語教育における評価」です。



カリフォルニア大学サンディエゴ校教授 當作靖彦
とう さく やす ひこ

日本語教育における評価

1. はじめに

「教えること」と「評価すること」には重要な関係があります。教育目標やアプローチが変化すると、それに伴い評価する内容や方法も変わることがあります。その逆に新しい評価方法の導入によって教育の内容や方法が変わることもあります。このような点で「教えること」と「評価すること」は相互作用的な関係も持っています。例えば、80年代以降外国語教育において、コミュニケーション能力を重視した教育のアプローチがさかんになりましたが、ACTFLのOPI¹のような運用能力の測定を重視した評価方法が開発され、多用されるようになったのはこのような例です。

2. 評価方法のタイプ

正しい評価方法を選び、実践することにより教育効果を大きく上げることもできます。その意味で評価は教育にとって大きな意味を持っています。教育の目的、環境、学習者などに応じて正しい評価方法を選び、評価を開発、実践できることは教師の能力として重要なものです。評価方法の分類のしかたについて簡単に見てみましょう。

(1) 教室内評価と教室外評価

「教室内評価」とは、特定のカリキュラムに基づいて評価を行う場合（例えば、教室内の漢字テストや語彙テストなど）です。「日本語能力試験」など、カリキュラムとは関係なく評価を行う場合は、「教室外評価」といいます。

(2) 形成的評価 (formative assessment) と統括的評価 (summative assessment)

教師や学習者に学習過程や学習状況に関する継続的な情報を与えるためにデザインされた評価、例えば、教室内のクイズなどは「形成的評価」と呼ばれます。それに対し、教育、学習過程の最終段階に学習者が

どれくらいのレベルに達したかを調べる評価は「統括的評価」と呼ばれます。

(3) 集団基準準拠評価 (norm-referenced assessment) と目標基準準拠評価 (criterion-referenced assessment) 「集団基準準拠評価」はテストを受けた学習者の得点を総受験者の得点と相対的に比較する評価です。「目標基準準拠評価」はテストの結果を予め定められた基準と比較する評価です。

(4) 到達度テスト (achievement test) と熟達度テスト (proficiency test)

学習者がカリキュラムの内容をどれくらいマスターしたかを評価するのが「到達度テスト」で、学習者の目標言語の熟達度を評価するのが「熟達度テスト」です。

(5) 単純項目評価 (discrete-point assessment) と全体的能力評価 (global assessment)

評価の中には一つの言語項目の知識を調べるテストである「単純項目評価」と、いろいろな言語項目に関する能力、知識を組み合わせるタスクに答えるテストである「全体的能力評価」とがあります。前者の場合、通常正しい答は一つしかありませんが、後者の場合にはタスクに対する適切な答は多数あります。

(6) 直接的評価 (direct assessment) と間接的評価 (indirect assessment)

「直接的評価」は、評価の際に受験者が評価の対象になっているスキルそのものを使い、それを測定することです。一方、そのスキルの根底にある能力を測定するものは「間接的評価」と呼びます。

(7) 要素分解評点法 (componential scoring) と全体的評点法 (global scoring)

「要素分解評点法」とは、例えば、作文を評価する際に、文法能力、語彙能力、文字能力など要素ごとに分けて評価する方法です。逆に、全体的な内容、書き方で評価する方法を「全体的評点法」と言います。

正しい評価方法が一つだけであるとは限らないということも理解しておく必要があるでしょう。

¹ ACTFL (American Council on Teaching Foreign Languages) の OPI (Oral Proficiency Interview) はインタビューを通して会話能力のレベルを判定しようという評価の方法です。

3. 評価の最近の動き

近年、「学習者中心」の外国語教育のアプローチがさかんになる中で、評価の目的、方法に大きな変化が見られ始めています。「伝統的な評価」では学習者を点数により順位づけるとか、グループ分けするということに主眼が置かれていました。学習者が学習目標を理解し、学習の方法、過程を内省し、学習に主体的に取り組むことを重視する「学習者中心」のアプローチでは、適切な評価方法を使うことにより、学習の動機を高めたり、学習者の弱い部分に関するフィードバックを与え、学習目標を設定し直したり、強い部分をさらに伸ばしたり、学習方法を教えたりすることも可能であると考えられるようになってきました。すなわち、「評価」により、学習者を助け、学習をより効果的にしようというわけです。最近の教室内の評価では、学習の結果のみならず、学習の過程を評価し、学習者の助けになるようなフィードバックを与える方法がよく使われています。また、学習者を評価に積極的に参加させたり、評価の中で学習者と教師、学習者同士が協力する方法が盛んに使われています。このような評価方法は伝統的な評価方法に替わるものとして「代替的評価 (alternative assessment)」と言われます。この方法ではペーパーテストに替わり、ポートフォリオ²やジャーナル³、学生による自己評価、学習者と教師の面談などが使われます。ポートフォリオの中には伝統的なテストの他、作文、学習日記、学生が作った日本語による作品(例えば、ポスター、壁新聞など)などを入れ、学習者の能力の発達の様子を概観できるようにしたりします。そして、ルーブリックといわれる記述を用いたスコアリングの方法を使い、学習者に自らの学習状況、能力の進展の状況をわかりやすくフィードバックするようにしています。また、言語の運用能力の開発が強調される中で、運用能力を評価の対象とする傾向が強くなってきました。しかし、文法、語彙の知識を点数によって評価するような伝統的な評価の方法もまだ広く使われていますし、特定の目的、状況におけるそのような評価方法の有用性も否定できません。「伝統的な評価法」と「代替的評価法」をうまく組み合わせて教室内の評価を行うことが大切でしょう。

読解活動評価のルーブリックの例

	目標以上を達成	目標を達成	まだ努力が必要
内容理解	必要な情報を全て理解した	必要な情報を大部分理解した	基本的な情報がある程度理解した
読解のストラテジー	ストラテジーを効果的に使った	ストラテジーをある程度使った	ストラテジーをあまり使っていない

4. 最後に

評価を行う際には、評価したいことは何か、評価の目的は何か、評価の結果は何に使われるかを考える必要があります。評価の内容、方法を選択したら、果たしてそ

の内容、方法で評価したいことを評価できるのか、評点の方法は学習者に適当なフィードバックを提供するか、学習者は評価の対象を十分学習しているか、などを考えて評価を実施しましょう。また、教室内での評価を効果的に行うためには教師は「学習の最終目標は何か」「現段階での学習目標は何か」を学習者に知らせ、「評価の目的は何か」「目標達成をどのように評価するか」などを明示的に説明できなくてははいけません。

学習者は試験のために勉強する傾向が強く、いいテストを与えると学習効果も上がるという、いわゆる波及効果 (backwash effect) もあります。また、評価結果や評価過程を観察、分析することにより、教師は自分の教育の方法、内容を内省し、教育効果を改善するデータを集めることができます。その意味で評価は非常に重要な意味を持っています。日本語教師にとって評価についての知識を得、適切な評価を行っていく能力を開発することは非常に大切なことと言えると思います。

2 ポートフォリオとは学習成果のサンプルとなる作文、試験、ビデオ、プロジェクトなどを評価結果、内省結果とともに学習者別に保存しておく、それぞれの学習者の言語能力の発展がわかるようにしたものです。

3 ジャーナルは学習者が学習の過程、成果を内省した記録です。

基本的な参考文献

- 池田央 (1992) 『テストの科学 - 試験にかかわるすべての人に -』 日本文化科学社
- 石田敏子 (1992) 『入門日本語テスト法』 大修館書店
- オラー、J.W. Jr., (1994) 『言語テスト』 秀文インターナショナル
- 日本語教育学会 (1991) 『日本語テストハンドブック』 大修館書店
- バックマン L.F. (1997) 『言語テスト法の基礎』 C.S.L. 学習評価研究所
- ブラウン、J.D. (1999) 『言語テストの基礎知識』 大修館書店
- Genesee, F. and J. Upshur. (1996) Classroom-Based Evaluation in Second Language Education. Port Chester, N.Y.: Cambridge University Press.
- Henning, G. (1987) A Guide to Language Testing: Development, Evaluation, Research. New York: Newbury House.
- Hughes, A. (1989) Testing for language teachers. Cambridge: Cambridge University Press.
- Herman, J., P. Aschbacher, and L. Winters. (1992) A Practical Guide to Alternative Assessment. Alexandria, VA: Association for Supervision and Curriculum Development.
- Rennie, J. (1998) Current Trends in Foreign Language Assessment. ERIC Review 6.1.27-31.